

社会学における先祖祭祀研究の現在

孝本貢

社会学における先祖祭祀研究の現在

一 家・同族と先祖祭祀

二 高度経済成長と先祖祭祀の変容

論文要旨

社会学における先祖祭祀の研究は家の解明の一環として行われてきたことはいうまでもない。家の社会構造的特質を象徴的に表現しているものとして家・同族先祖祭祀が取り扱われ、先祖とは誰か、先祖靈の性格、先祖祭祀の機能、それらのバリエーションが描き出されてきた。柳田国男、有賀喜左衛門を先駆者として、先祖祭祀は日本社会の構造的特質解明の戦略的拠点のひとつとして捉えられてきた。家の超世代的永続への要請が、家を創設した始祖と代々の家長夫婦が先祖へと連なり、先祖中心の社会結合体をもたらしたといえる。しかし、先祖祭祀と死者祭祀の混在しているなかで、死者祭祀の側面をどのように捉えるか、祟りをもたらすという現象をどのように位置付けるかなど未解決の問題は多い。

高度経済成長期以降、日本社会は量的側面に留まらず、質的にも大きな変動を遂げた。新民法の浸透と相俟つて先祖祭祀は衰退していくものと予測されていていたが、実態はその実修率の増加の傾向さえみせていった。一九六〇年代後半から家先祖祭祀の変容の実態解明が行われていった。それは家の伝統を背負つた日本の現代家族の特質に迫ろうとしたものである。こうした研究は森岡清美の業績などをもとに展開されている。R・スミスのメモリアリズ

ム、高橋博子の心的交流、森岡清美の非家性的先祖、孝本貢の縁的先祖祭祀など、その特徴が多様に語られているようまだその捉えかたは定まっていない。一方では民族学の領域から家を直系家族制度としてのみ捉える視点の問題性が提起され、さまざまな先祖祭祀の実態が掘り起こされ、そのなかで現代のそれをどのように位置付けるかの問題も浮かび上がってきた。また、新宗教において先祖供養の強調、先祖の「たたり」などが説かれ、相当の拡がりをもつていていることから、家と不可分なものとしての先祖祭祀の把握の仕方についても再考を迫られているといえよう。